余 市 町 観 光 振 興 計 画

振興テーマ 「よいち魅力再発見」

春：余市川の岸辺を彩る桜並木

夏：夕日が沈むシリパ岬

秋：ワインぶどう畑（ヴィンヤード）

冬：よいちキャンドルナイト

余　市　町

目　　次

本　　編

序　章

１．計画の背景と目的　・・・・・・・・・・１
２．計画の位置付け　・・・・・・・・・・１
３．計画の期間　・・・・・・・・・・１
４．計画策定の基本方針　・・・・・・・・・・２

第１章　余市町観光の現状と課題

１．余市町観光を取り巻く現状　・・・・・・・・・・３
２．余市町観光の課題　・・・・・・・・・・４

第２章　余市町観光振興の施策

１．余市町観光振興のテーマ　・・・・・・・・・・６
２．余市町観光の資源　・・・・・・・・・・８
３．余市町観光振興の具体的方策　・・・・・・・・・・１１

第３章　余市町観光振興の計画の推進

１．推進体制　・・・・・・・・・・１９

分析資料編

第１章　観光統計

１．全国的な観光の現況　・・・・・・・・・・２１
２．北海道観光の現況　・・・・・・・・・・２１
３．余市町の観光現況　・・・・・・・・・・２２

第２章　余市町の観光資源

１．余市町の観光資源　・・・・・・・・・・２３
２．立地環境・交通アクセス　・・・・・・・・・・２７

第３章　第４次余市町総合計画≪観光振興≫

１．余市町観光振興の基本目標　・・・・・・・・・・２８
２．余市町観光振興の主要施策の体系　・・・・・・・・・・２８

その他資料編

１．余市町観光振興計画の策定体制　・・・・・・・・・・２９

本編

序　章

１．計画の背景と目的

平成９年度に長期計画として策定された本町の観光振興計画は、策定当初から既に相当の年数が経過しており、その内容についても近年の本町を取り巻く社会経済情勢が大きく変化してきていることや、多様化する観光ニーズの対応に困難となっております。

この間の傾向として、かつては観光リゾートや大型集客施設の相次ぐ開設に見られたように、主に団体客をターゲットとした終日型観光スタイルが主流のものから、近年は個人や家族或いは少人数のグループ観光が主流になりつつあり、また、高速道路網や道の駅の整備普及、車社会の定着、さらには、目覚ましい情報端末機の普及と進化により、観光客の行動範囲も広がる傾向を見せています。

このため、こうした情勢の変化を的確に捉えた上で今後の社会経済情勢や現状の観光ニーズを踏まえた新たな計画策定を行う必要があるとともに、平成２４年度からの長期計画として策定された「第４次余市町総合計画」との整合性を踏まえながら様々な視点からのアプローチ（※注１）を行い、時代に適合し本町の特性を活かした実効性の高い計画として新たに策定を行うものです。

２．計画の位置付け

本計画は、余市町観光振興条例第５条の規定に基づき計画策定を行うもので、**「第４次余市町総合計画」**における**「まちづくりの基本計画」**中**「観光振興部門」**において掲げている目標の達成に向けた基本計画として位置付けるものであります。

３．計画の期間

めまぐるしく変化する近年の社会経済状況や多様化する観光ニーズに対して柔軟な対応を図る観点から、**平成２５年度を初年度とする平成２９年度までの中期的な５年間の計画期間**とし、以後５年毎に社会経済状況等の変化を踏まえた上で適切な計画内容の見直しを行うことを基本とします。

なお、計画期間中であっても大きな社会経済情勢の変化があった場合には、随時柔軟な見直しを図ることとします。

※注１　アプローチ：学問・研究などの対象に接近すること。

４．計画策定の基本方針

計画の策定にあたっての基本方針は、次のとおりとします。

内容が簡素でわかりやすい計画とします

可能な限り町民の皆さんの意見等を反映させた計画とします

取り組み可能な実効性の高い計画とします

必要に応じ見直しが可能な弾力性のある計画とします

第１章　余市町観光の現状と課題

１．余市町観光を取り巻く現状

近年の本町観光を取り巻く現状は、長引く景気低迷の影響など様々な社会経済環境の変化により、ここ５年間の観光客入込み数は年８０万人前後に留まっており、１００万人を超えていた１０年前と比較すると減少しております。

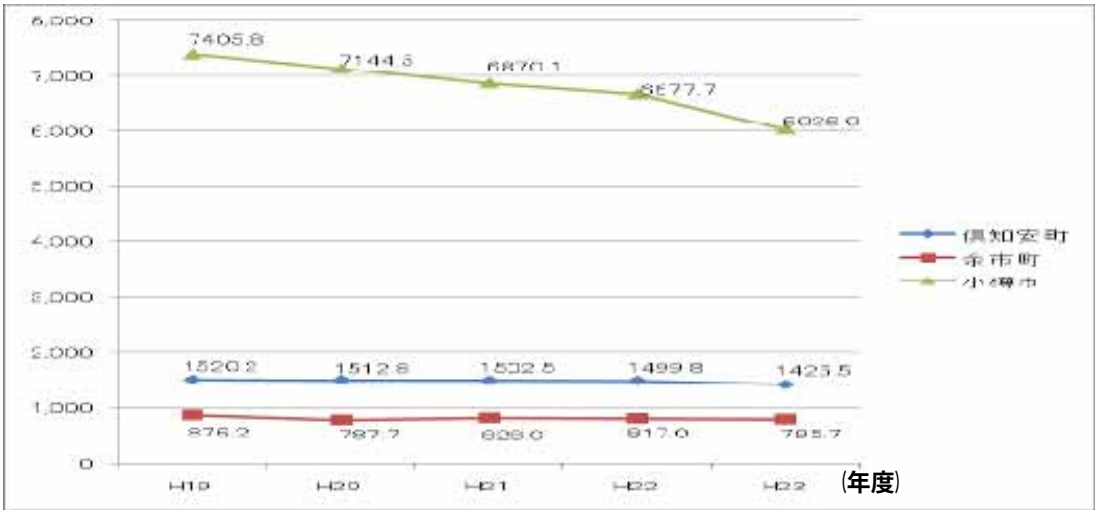
また、この内、日帰り客の割合が極めて１００％に近い数値を示していることと合わせ、シーズン別での入込み割合は、５月から１１月までの上半期で約８５％を示しており、典型的な日帰り型半年観光となっているほか、大きな観光資源を抱えている小樽、積丹、ニセコ方面への分岐点ともなっていることから、通過型観光であることも大きな特色となっています。

さらに、本町の観光資源別に見た場合では、特定観光施設への固定化が見られ、平成２３年度においてはニッカウヰスキー㈱北海道工場が全体入込み数の３２％を占めており、ピーク時からの低下は見られるものの、依然、本町観光の中心となっています。

平成２３年８月には余市ワイナリーがリニューアルオープン（※注２）しましたが、道内最大の生産量を誇る本町のワインぶどうから造られた余市ワインショップをはじめ、レストランや絵画ギャラリーも併設されており、食とアートを楽しむ空間としてニッカウヰスキーに次ぐ集客効果が期待されています。

しかし、引き続き現在の厳しい社会経済状況の中で、大掛かりな観光開発や観光施設の建設が困難となっているため、今後の観光施設においては、特定観光施設への依存度が高い状態の体質から抜け出すには、改めて、余市町ならではの隠れた観光資源、あるいは、魅力が充分活かされていない観光資源を掘り起こし、点から線、線から面へと効果的なつながりを持った観光振興を図れるかが大きな課題となっている現状にあります。

（千人）　**後志管内（小樽市・余市町・倶知安町）観光入込客数（H19～H23）**



※注２　リニューアルオープン：既存の店舗などの改装・改修を行って開店すること。

２． 余市町観光の課題

①観光資源の掘り起こしと既存資源の活用

本町には多様な観光資源が点在し、観光地として高い資質に恵まれていますが、これらの資源は、個別的には高い人気がありながらも、他の資源と一体的・有効的に活用されてこなかった面があります。

また、観光資源としての素質はありながらも、あまり脚光を浴びてこなかったものや一般的に知られてこなかったものもあり、改めて、その掘り起こしを図る必要性や資源の組み合わせに工夫を図ることにより新しい観光資源としての魅力を発見していくことが重要な課題となっています。

②体験型観光メニューの開発

現在、本町の体験型観光として位置づけることが可能なメニューとしては、観光農園での季節ごとの果樹の収穫体験や、海岸・防波堤等での釣り体験、マリンレジャー（※注３）としての遊漁船等での海釣りや航海体験等、ごく限られたものしかないため、今後はニッカウヰスキー北海道工場等の観光拠点施設や文化財施設、或いは、農水産業の各関連施設と連携した体験型観光メニューの開発を進めることにより終日滞留型観光の推進を図ることも重要な課題となっています。

③観光と食の連携

観光資源は、景観や施設だけでなく、その地域ならではの特徴的な食文化も重要な資源のひとつです。

本町は、四季折々の新鮮な海の幸や山の幸に恵まれており、これを利用した農水産加工品も数多くありますが、今後は単に土産品や生食物として販売するだけではなく、地元農水産物を効果的に活用したフードメニューやスィーツメニューのほか、ワインをはじめとした果実酒等のドリンクメニューの積極的な研究開発の推進とともに、その提供場所となる飲食店との連携協力など、如何に食と観光を有効に融合させていくかということも大変重要な課題です。

※注３　マリンレジャー：海を舞台に楽しむ余暇のこと。

④観光資源の線的、面的整備

現在の本町観光の中心は、依然ニッカウヰスキー北海道工場一帯をはじめとした特定観光施設への依存が高い状況が続いており、これを如何に本町産業の基盤である周辺の農水産関連施設や文化財施設等の観光資源に誘導していけるかが大きなポイントです。

このため、改めて周辺地域の受け入れ施設や体制の面的整備を図ることが必要になるとともに、資源を有効に活かすための「見る」「遊ぶ」「学ぶ」「食べる」といったような目的別のコースメニュー、或いは、これらを組み合わせたコースメニューの開発も進めながら線的な整備を図っていくことも重要な課題です。

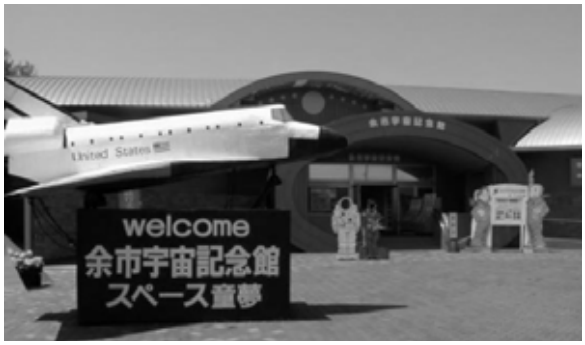
また、近年マイカーなどによるドライブ観光客の増加が顕著となっており、その行動範囲も一市町村に留まらず複数の市町村にまたがるなど広がりを見せています。

こうした傾向に対処するためには、北後志単位での情報発信の共同化に工夫を凝らすとともに、食関連のイベントの共同開催や我が町の「桜の名所」「紅葉の名所」などといった四季折々の広域での観光コースのメニュー化の取り組み等、広域での線的・面的な整備を図ることも必要です。

⑤観光推進体制の整備

観光振興は、いわば観光産業の振興であり利益を伴う重要な経済活動の一つでもあることから、決して行政だけが主体的にやれば良いというものではなく、関連産業団体組織が主体性を持つことを基本として密接な行政との連携の下に進める必要があります。

このためには、改めてお互いの組織・人員体制の見直しを図るとともに、これまでのようなイベント毎の実行委員会組織ではなく、総合的な観光振興を図るための組織の再構築を図ることも重要な課題の一つです。



第２章　余市町観光振興の施策

１．余市町観光振興のテーマ

よいち魅力再発見

第１章では、本町観光を取り巻く現状と今後の振興にあたっての主な課題を検討してきました。

観光振興計画の策定にあたっては、振興を図るための基本的な方針を定めて取り組む必要があるとともに、これまでの計画内容の検証結果を踏まえる必要があります。

以前の結果においては、長期計画として１０年後のあるべき理想の姿を想像した提案型の色彩が強く、そのための財政的な対応や実施体制のあり方にしても長期計画であったが故に、結果的には本町を巡る社会的経済情勢等の変化に対応出来ず計画との多くの乖離が見られたことや、この間において当初計画に対する適切な見直しを行うことが出来なかったことも反省点としてしっかり認識しなければなりません。

このため、今後の観光振興においては、現状の社会経済情勢や本町観光産業の実態、さらには、本町の財政状況を含めた今後の経済見通しを見据えた実効性・弾力性のあるものにする必要性があるとともに、ハード面重視のものから本町の特徴・特性を十分活かしたソフト面を重視したものに転換していく必要性があります。

言うまでもなく、本町には海、山、川に恵まれた素晴らしい自然景観とともに、長い歴史の中で培われてきた他に誇るべき農水産業、そして人と文化がありますが、こうした観光素材をまだまだ十分に活かし切っているとは言えません。

観光客から見れば、普段私たちが何気なく見過ごしているもの、これまであまり脚光を浴びてこなかったものを新鮮で魅力ある観光素材に変えていく可能性や潜在能力を本町は秘めています。

今回の観光振興のテーマの設定にあたっては、こうした視点からのアプローチにより取り組むために定めるものです。

２．余市町観光の資源

・自然・景観：余市川の清流や北限の鮎、ニセコ積丹小樽海岸国定公園に指定されている海岸線等、余市町は豊富な自然の観光資源に恵まれています。
生産量全道一を誇るワイン醸造用ブドウ畑、そしてその景観も観光資源の一つとなっています。

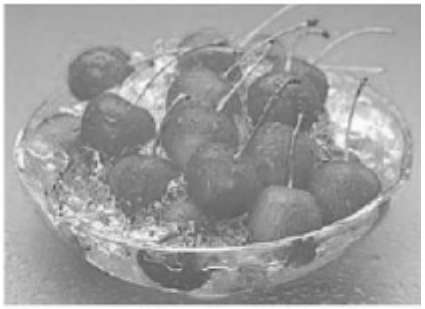
・観光農園等：余市町内の観光農園については、年間６万人前後の入込みがあり、観光資源として魅力があります。また、農家民宿や食事の提供設備を備えているなど、それぞれの観光農園で特徴を出しています。

・文化財施設：・重要文化財：旧下ヨイチ運上家
・国指定史跡：旧下ヨイチ運上家、旧余市福原漁場、
大谷地貝塚、フゴッペ洞窟
・国登録有形文化財：ニッカウヰスキー㈱北海道工場
・北海道指定文化財：西崎山環状列石、
天内山遺跡出土の遺物
・町指定文化財：３４件

・産業施設：・ニッカウヰスキー㈱北海道工場は国登録有形文化財に指定されており、現在の余市町の最大の観光資源として、また旅行エージェントの中でもツアーの組み込まれている町内では数少ない施設になっています。
・余市ワイナリーは平成２３年に「レストラン・ギャラリー」を工場内に併設し、さらには、従来からの試飲施設も整備され、観光客の受け入れ態勢を整えています。余市ワイナリーは、製造過程も備えた施設として、充分に観光拠点として期待されます。

・**特 産 品** ：・水産物・水産加工品
えび、たら、かれい、いか、鮎、たらこ、身欠にしん、鮭、数の子、各種珍味類
・農産物
りんご、なし、ぶどう、さくらんぼ、トマト、いちご、そ菜　他
・酒造
ウイスキー、ワイン
・菓子
りんごもなか、ウイスキー最中
・農産加工品
りんごのほっぺ（果汁 100%ジュース）、ぶどうジュース、トマトジュース

・　**温　泉**　：・余市には、市街地の銭湯式の温泉をはじめ、果樹園の中、国道沿いにと泉質の違う温泉がたくさんあります。かくれた名湯に出会う楽しみもまた格別です。



３．余市町観光振興の具体的方策

Ⅰ．町内観光基盤の整備

①　観光資源の掘り起こしと既存資源の魅力の再発見

・ワインぶどう畑（ヴィンヤード（※注４））としては本場フランスやドイツにも負けない丘陵景観のＰＲと受け入れ態勢の整備を図ります。
・道の駅の施設集約化と機能拡大のための再編整備を進めます。
・おすすめ景観を結んだウォーキング（フットパス（※注５））コースの開発を検討します。

②　日帰り通過型半年観光と単体観光施設依存型からの脱却

・現在の町内の観光施設は、観光ルートとしては点在型となっています。
・現在提示されている観光コースとしては「道の駅：スペース・アップルよいち」を起点としたモデルコースとなっています。
・今後、観光資源のセットメニュー化などによる終日滞留型観光への転換を図ります。

※注４　ヴィンヤード：ぶどう畑（英:Vineyard）のこと。
※注５　フットパス：イギリスを発祥とし、「森林や田園地帯」「古い街並み」など地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと【Foot】ができる小径（こみち）【Path】のこと。

③　参加体験型観光の推進

・農業体験については、観光農園のみならず一般の農家においても、各種の農業体験の受け入れの実施を検討します。
・漁業体験について、「地引き網体験」は町内においても一部で実施しています。
・本町では、フィッシャリーナに釣りの可能な防波堤が整備されており、釣りに携わる体験イベントを推進します。
・農産品・水産品等の製造体験も参加体験型観光の一つとして位置付け、事業者との連携のもと推進します。

④　各産業と連動した観光振興

(ア)　地元食資源を活かした観光との連携について

・一箇所で多種多様な農産物、海産物等を買える販売所及びシステム整備を検討します。
・特産品との連動を視野に置き、地場の食材を使用した料理の開発（地元飲食業者の協力を得て、料理を開発）の展開を図ります。
・北海道内でも有数な果樹産地である余市町の豊富な果物をスィーツ・ケーキなどに活かせる取り組みを進めます。

(イ)　生産者と観光事業者の連携を支援するしくみの整備について

・生産者（農業者・漁業者など）と観光事業者が流通の当事者として参画できるよう環境の整備を行います。

・地場産品を生かした魅力づくりの取り組みの強化を図ります。

(ウ)　６次産業の取り組みについて

・農業・漁業者が自らの生産物に対し自らが付加価値を付け、さらに販売まで手掛ける６次産業化の推進と観光面との連携を図ります。

・道内一のワイン醸造用ブドウの生産量と併せ北海道初の「ワイン特区」認定をきっかけとしたワイナリー（※注６）や農家民宿、農園レストランなど新たなワイン産業の形成を進めます。

・他の生産物においても、既存の直売等を含めた中で、新たな産業を創出します。

・ヴィンヤード（※注４）を示したマップ等を作成します。

・６次産業化推進と連動した地元生産物等の食資源を活かすためのご当地メニュー開発や加工品開発による町内レストラン・食堂等との提携を推進します。

※注６　ワイナリー：ワインを生産する建物または不動産、もしくはワイン会社などワイン製造に関わる事業のこと。

Ⅱ．広域観光における推進

① 広域的観光推進体制の充実

北海道観光推進機構、後志観光連盟、北後志観光連絡協議会との連携充実化を図り、キャンペーン等の参加について、今後についても機会があるごとに積極的な参加に努めます。

② 広域観光への取り組み

大きな観光資源が少ないのは本町ばかりではなく、北後志各町村共通の悩みとなっております。札幌圏に近い北後志は手ごろなマイカーやバス観光のルートになっており、一町村のみの観光で終わらせるのではなく、それぞれの自慢の特色をコース化・メニュー化したものを「北後志自慢〇〇めぐり」などとして開発し、一元的な情報発信と特典的なサービスの創出を検討します。

Ⅲ．観光推進体制の確立

① 観光関連団体との連携強化

本町の観光関連事業は、連携を図りながらも行政主体によるものと民間である観光協会主体によるものと２元的な要素から構成されている部分があり、事業を執行する上にあたり体制的に不十分な状態にあります。

観光関連事業の企画執行にあたっては、機動性、柔軟性、即応性が求められており、これらに適切に対応していくためには、可能な限り民間が主体となった組織を再構築し、これを行政がバックアップを行う一元的な推進体制を改めて立ち上げることが求められます。

② 歓迎体制の確立

笑顔と親切な対応は基本中の基本であり、その町や村のイメージを左右しかねない重要な要素であるため、事業者における研修ばかりでなく、観光ボランティア制度を含む町民の育成と役割の意識付けを図ることが重要です。

町全体での歓迎体制の確立が必要であるとともに、「おもてなしの心」が肝要であり、観光に携わる者は今後も一層努力を行い、歓迎体制の推進を図っていきます。

「おもてなしの心」を大切に、また訪れてみたいとの機運にさせる環境作りに努めます。

外国人観光客については、今後は小樽やニセコ・倶知安に限らず、本町への外国人の訪問も増加していくことが予想され、受け入れのためのインフォメーション機能（※注7）の充実を進めます。

・ホスピタリティ（※注8）運動の進め方

※観光協会・商工会議所・区会連合会・青年会議所・観光事業者等、町全体として取組みを図ります。

手法＝呼びかけ団体⇒独自に取り組みを行っていく仕掛け・機運を高めていくよう努めます。

※注７　インフォメーション機能：
情報・報道・お知らせ・受付・案内所などの目的に応じた働きをするところ。

※注８　ホスピタリティ：
観光客が安心して快適に観光できるように、地域の人々がおもてなしの心で接し観光客をあたたかく迎えること。

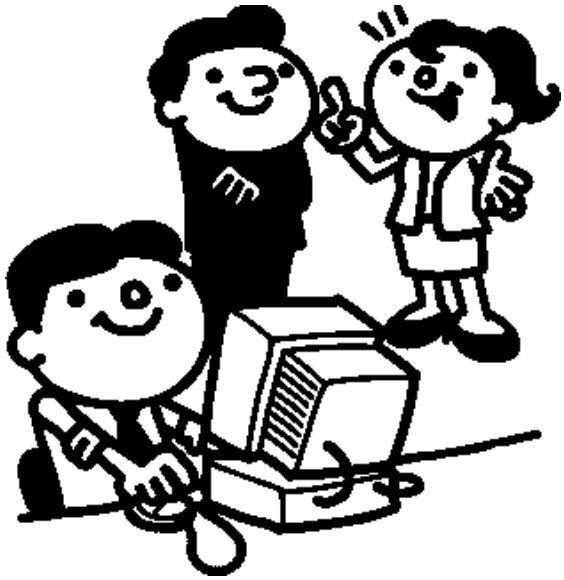
③ 民間・行政の役割の在り方

現在の「北海ソーラン祭り」、「味覚の祭典」等の行事については、今一度民間主導ベースでの実施を考えるべきであり、行政は補完的立場として支援体制の確立を図ります。現在の関係組織をもとに協議会などを再編成し、民間団体の参加機会を増やす取り組みを検討します。

さらに、イベントに関わらず、普段から一般住民が集まって議論できる場の環境づくりを図ります。

また、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（※注9）などの活用を検討します。

※注９　ソーシャル・ネットワーキング・サービス：
個人間のコミュニケーションを促進し、社会的なネットワークの構築を支援するインターネットを利用したサービスのこと。



Ⅳ．祭り・イベントの開催

① 北海ソーラン祭りにおける参加体験型イベントの拡充

北海道の文化遺産「北海道民謡ソーラン節」の継承普及を図ると共に、本町の産業文化の振興、町民福祉の増進を図ることを基本目的とし、併せて本道と本町の開拓歴史を偲び、愛町の精神の向上と青少年の健全な育成に寄与することを目的として毎年７月の第１土､日には、北海ソーラン祭りが盛大に行われています。近年は、ソーラン踊りの会場も変更となり、さらに一般観覧者を対象とした「ソーラン踊り体験コーナー」を設置するなど、参加体験できる内容への充実化をより一層図っていきます。

② 味覚の祭典の実施

多くの来場者の集客実績があり、農水産物や加工品など、本町の地場産品等のＰＲをより一層拡充し、町の産品の宣伝の場として、生産者、加工者が参加することにより、消費者の動向を把握できる場としても活用していきます。

③ 新規のイベントの開催の検討

ワインの試飲を兼ねた宿泊ツアーも余市町ならではのものとして検討します。

Ⅴ．自然に恵まれた本町の優位性を生かした効果的な宣伝活動の促進

① テレビ、新聞、雑誌等における宣伝啓発

従来の宣伝啓発に加え、食・観光イベント情報誌への掲載を積極的に図っていきます。

② ホームページ、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（※注９）などにおける宣伝啓発

携帯端末サイトへの情報登載や、インターネット、フェイスブック（※注 10）などの活用により、観光客が知りたい情報をリアルタイムに得られるよう、効果的な情報提供を図っていきます。

③ 全道的なイベント開催時における宣伝啓発

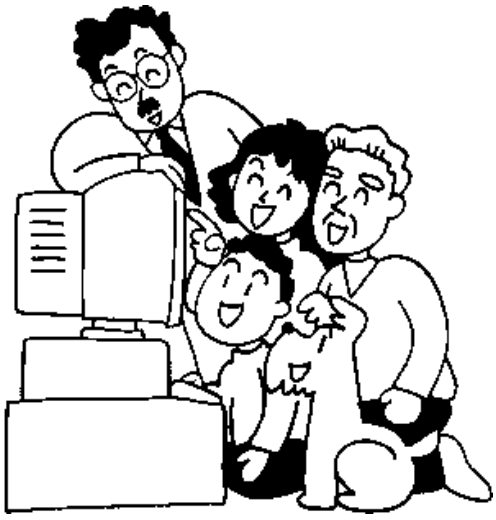
住民や住民団体、事業者、観光関連団体と観光情報の共有を図り、一体的、効果的な情報発信に努めていきます。

さらに、スポーツ大会などに地元特産品を提供するなどの方法で、地域ＰＲに努めていきます。

また、ふるさと大使等を例にとり、産業団体が任命する「○○大使」など、インパクトのある形で全国に発信するのも方法です。漠然としたＰＲではなく、特化した形でのＰＲを検討します。

※注９　ソーシャル・ネットワーキング・サービス：
個人間のコミュニケーションを促進し、社会的なネットワークの構築を支援するインターネットを利用したサービスのこと。

※注１０　フェイスブック：
米国の代表的な SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の一つ。



第３章　余市町観光振興の計画の推進

１．推進体制

本計画を推進していくためには、その主体となる住民･住民団体、事業者、観光関連団体、町がともに連携していくことが求められます。それぞれが自主的・積極的な取り組みを進めるとともに、相互に理解・協力していくことが求められています。

（１）住民・住民団体の位置付け

住民・住民団体は、それぞれの地域において、郷土とともに歩み、郷土の発展に寄与してきました。まさに地域経済・文化の担い手であり、まちづくりの主役です。郷土への愛着と誇りを持ち、積極的に郷土の魅力を発信する重要な主体となります。観光客に対しては、観光客を温かく迎える親切なおもてなしの心を持ち、観光客との積極的な交流を図ります。

施策の取り組みとしては、観光ルートや参加体験型観光などは、観光関連団体と連携を図りながら新規の発掘などを行い、祭り・イベントにおいては積極的な参加を行っていきます。

さらには、また訪れてみたいとの機運にさせる環境作りなど、ソフト面を大事にしていくよう努めます。

（２）観光事業者の位置付け

観光事業者は、余市町の観光産業の担い手として新たな魅力づくりに取り組むとともに、交通・宿泊・飲食・土産等、観光事業者相互の連携を密にし、観光客へのサービス向上に努めます。

施策の取り組みとしては、主に参加体験型観光の場を提供するとともに、観光客の歓迎体制の確立を推し進めていきます。

（３）観光関連団体の位置付け

余市観光協会をはじめとする観光関連団体は、観光振興を推進する中核的存在としての役割を発揮するため、独立した組織体制と同じ再構成を図ります。

また、団体間の連携を強化するとともに、住民、観光事業者、経済界、行政との調整・連携を相互が図り、効果的な誘致宣伝活動の展開や歓迎体制の向上に努めます。

施策の取り組みとしては、観光ルートの整備、各産業・観光関連団体との連携、広域観光における推進体制の充実、祭り・イベントの開催推進など、観光事業推進の中核として積極的な行動を行っていきます。

（４）経済界の位置付け

余市商工会議所をはじめとする経済界は、観光が本町経済における基幹産業のひとつに成長し、町内の様々な産業分野に直接、間接に経済効果をもたらしていることから、より一層の経済活性化を図るため、観光と各種産業との連携を強化することが求められています。

また、地域自立型経済への転換を図るため、観光事業者、観光関連団体、行政と連携し、観光消費による町内での経済波及効果を高めるなど、観光を軸とした産業構造の改革推進に努めていきます。

施策の取り組みとしては、観光資源の整理、広域的観光推進体制の充実、観光推進体制の確立、祭り・イベントの推進など、各産業・観光関連団体との連携のもと推進していきます。

さらに、６次産業の推進においても、産業団体が参加・協働できることがないか検討します。

（５）行政の位置付け

行政は、住民・住民団体、観光事業者、観光関連団体、経済界との連携を十分図りながら、余市町総合計画や本計画に基づく総合的な観光振興施策を推進するとともに、効率的な観光振興施策を実施していきます。

施策の取り組みとしては、社会経済環境の変化に適切に対応していくため、国・道及び周辺市町村等との連携を図り、情報収集や分析、観光振興のための提案等を行いつつ、住民・住民団体、観光事業者、観光関連団体、経済界とともに町内観光の整備、広域的観光推進体制の充実、観光推進体制の確立、祭り・イベントの開催推進への取り組みに努めていきます。

分析資料編

第１章　観光統計

１．全国的な観光現況

国民の観光旅行の動向

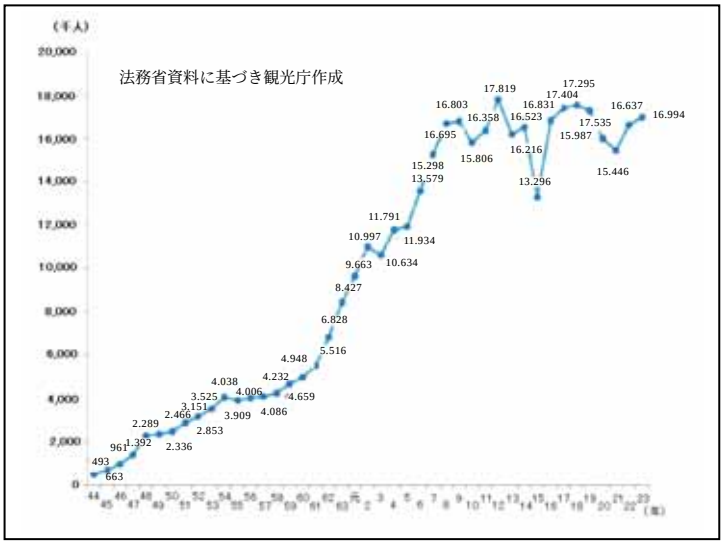
平成２３年の国民１人当たりの国内宿泊観光旅行回数は、１．３３回となり、対前年比で０．７％減となっており、また、国民１人当たりの国内宿泊観光旅行宿泊数は、２．１０泊となり、対前年比で０．９％減となりました。
また平成２３年の月別で見ると８月が最も多く、４月が最も少なくなりました。前年同月比を見ると、３月は７４．２％と大きく前年を下回りましたが、前年同月比の減少幅は徐々に縮小し、同年１２月は前年同月比１０２．７％まで持ち直してきています。
平成２３年の海外旅行者数は、１，６９９万人となりました。前年に比べると約３６万人増加し、対前年比２．１％増となりました。前年同月比を見ると、１２月が最も伸び率が高く、３月から６月は落ち込んでいます。
（観光庁：「旅行・観光消費動向調査」及び「宿泊旅行統計調査」による）

国内宿泊観光旅行の回数及び宿泊数の推移

（注）2008 年までは、20 歳から 79 歳までが調査対象。
2009 年以降は、前年齢が調査対象

出典：観光庁「旅行・観光消費動向調査」

日本人海外旅行者数の推移

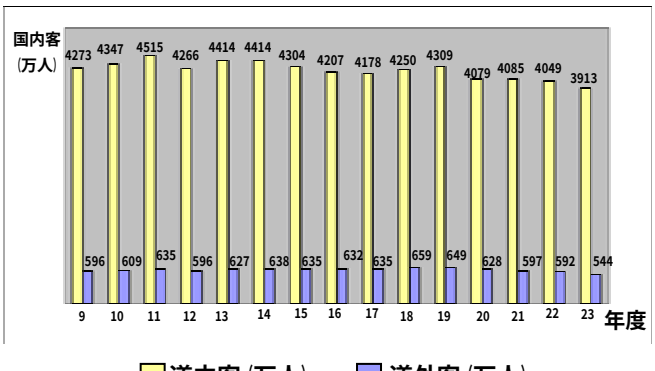


２．北海道の観光現況

北海道の観光旅行の動向

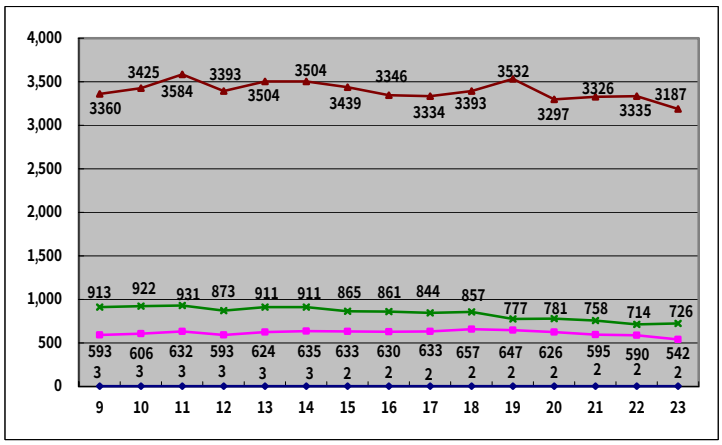
北海道の観光入込客数は、平成１１年度の５，１４９万人をピークに伸び悩んでおり、平成２２年度は４，６４１万人、平成２３年度は４，４５７万人となっています。
平成２２年度は、APEC 貿易担当大臣会合開催、東北新幹線新青森駅開業による本道（道南）への観光客の回遊などの増加要因があった一方で、口蹄疫の影響や、東日本大震災により国内外の観光需要の落ち込みが大きくなっております。
平成２３年度の前年度比は４．０％の減少となっています。
（北海道：「北海道観光入込客数調査報告書」による）

北海道観光客入込数の推移（H9～H23）



※千人以下四捨五入のため、合計が合致しない場合がある
「北海道観光入込客数調査報告書」（北海道）

国内客（万人）　北海道の道外・道内・日帰・宿泊観光入込数の推移（H9～H23）



「北海道観光入込客数調査報告書」（北海道）

３．余市町の観光現況

余市町の観光旅行の動向

余市町の観光入込客数（実人数）は、平成１７年度の１１３万７千人をピークに減少に転じており、平成２２年度は８１万７千人、平成２３年度は７９万６千人となりました。なお、後志管内における余市町の観光入込客数の規模は、平成２３年度は７番目の規模となっています。

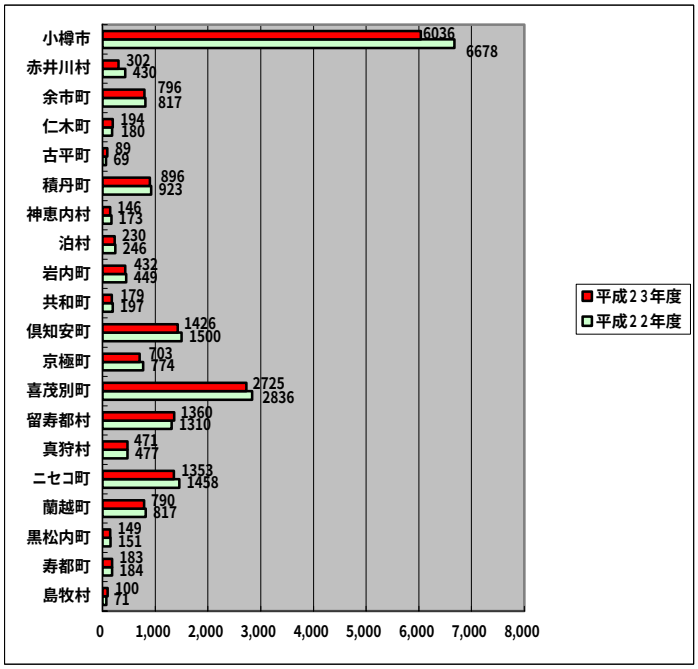
さらに国内観光客が低迷を続ける中、平成２３年３月１１日に発生した東日本大震災が平成２３年４月から９月における上期の観光入込客数に大きく影響しているとみられ、前年同期と比較すると９１．０％となっており、９．０％の減少となっています。

また、観光客入込数をシーズン別に見てみると、年間入込客数の約８５％が夏季（５月～１１月）に集中する状況となっています。

さらに観光客入込数を道外・道内別に見てみると、道内客が道外客を上回る傾向が続いており、観光入込客数がピークであった平成１７年度では、観光客入込数全体に占める道内客数の割合が８５．７％となっていたが、近年の道内客数の減少分が観光客入込数全体の減少につながり、平成２３年度で比較してみると、観光客入込数全体に占める道内客数の割合が７０．４％で、平成１８年度以降における道外客数は増加傾向にあります。

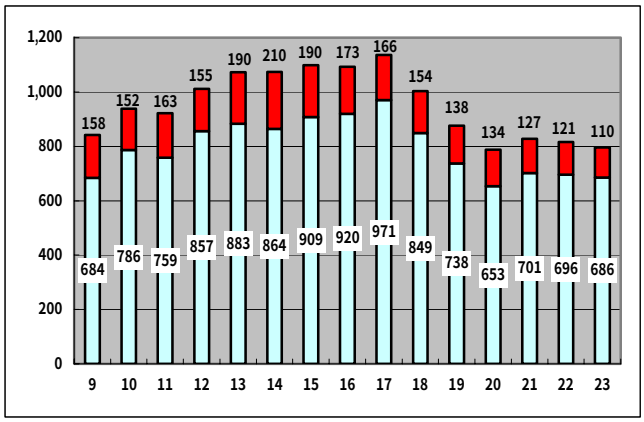
また、日帰・宿泊別で見てみると、平成２３年度における宿泊客の割合が２．８％となっています。

後志管内市町村別観光入込客数（H22～H23）　（千人）



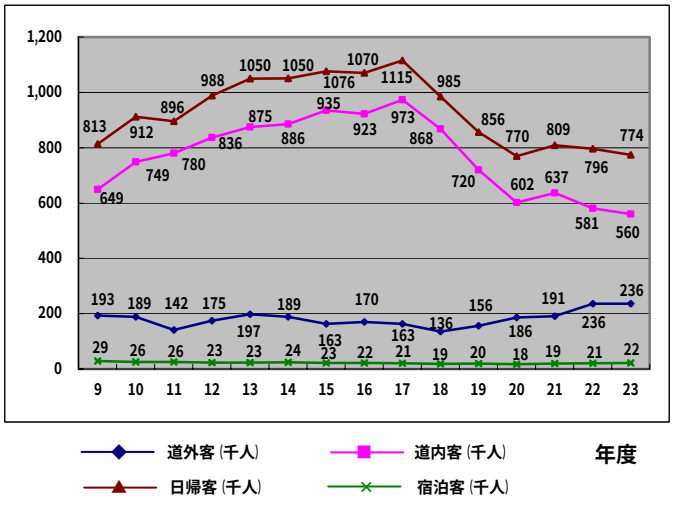
「北海道観光入込客数調査報告書」（北海道）

国内客（千人）　余市町シーズン別観光入込数の推移（Ｈ９～Ｈ２３）



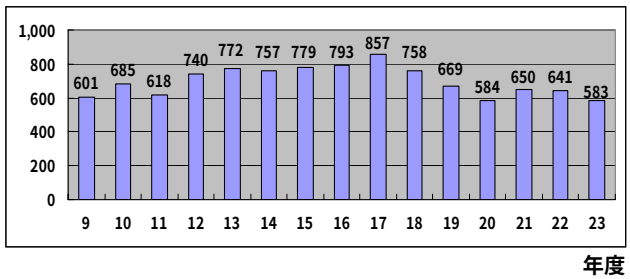
「余市町観光客入込数調査票」（余市町）

国内客（千人）　余市町の道外・道内・日帰・宿泊観光入込数の推移（H9～H23）



「余市町観光客入込数調査票」（余市町）

（千人）　余市町上期（4月～9月）観光入込数の推移（H9～H23）



「余市町観光客入込数調査票」（余市町）

第２章　余市町の観光資源

１．余市町の観光資源

（１）観光資源の概要

余市町は北海道積丹半島の基部に位置し、北は日本海に面し、東は小樽市、南は仁木町・赤井川村、西は古平町と接しています。

気候は、日本海を北上する対馬海流（暖流）の影響により、道内では比較的温暖な気候となっています。日中が高温で夜間は冷涼という１日の寒暖の差が大きい特徴があり、これが果樹の栽培に適した気候条件となっています。降水量・降雪量は道内のなかでは比較的多いほうとなっています。

町内には余市川・ヌッチ川・登川・畚部川等が縦断しており、その流域に市街地が形成されております。また、周囲は三方を緩やかな丘陵に囲まれており、市街地周辺の地味肥沃は土壌に、果樹園・野菜畑を中心とした農地が広がっています。

北北東及び東北東に延びる海岸線は１７ｋｍにも及び、沿岸には地方港湾の余市港と４つの漁港があり、温暖な気候と相まって古くから格好の漁場となっています。

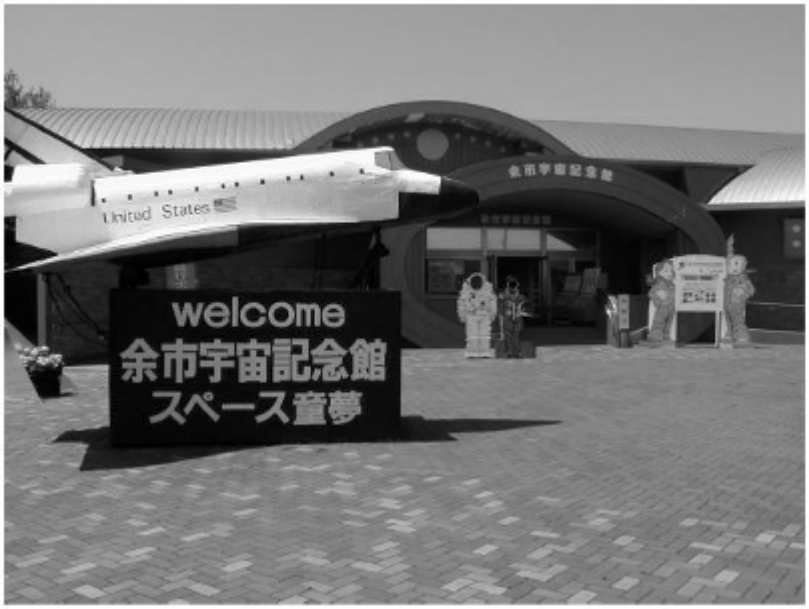
また、道都札幌市から６０ｋｍ、新千歳空港から１００ｋｍの距離にあり、さらにニセコ積丹小樽海岸国定公園の一部にもなっており、美しい景観に恵まれた海岸線や河川流域は観光価値も高く、さらには遺跡等の文化財など数多くの資源があります。

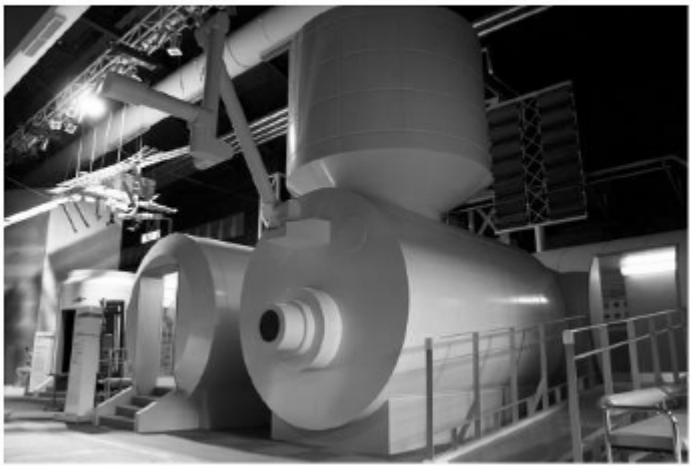
（2）主な観光資源及び施設の立地状況

分類	名称	説明文
景勝	円山公園	大正時代から花見の名所として親しまれてきた公園で、現在、ガラス屋根のピラミッド型施設を中心に、遊具広場や多目的広場が整備され、四季を通じてさまざまなレクリェーションを楽しむことができます。施設内には様々な植物が楽しめます。展望台からは、雄大な日本海を背景に余市町全景が見渡せます。
	ローソク岩	豊浜町の沖合約５００ｍの海上に４５ｍを越える高さでそそり立ちます。ローソク岩はこれまで何度か崩落が繰り返されたようで、昭和１０年代に大きな崩落があり、現在の姿になりました。神々の岩としてあがめられたローソク岩にはいくつかの伝説が残っています。ローソク岩周辺はかつて千石場所といわれたニシン漁場のなかでも特に良好な漁場でした。
	えびす・大黒岩	白岩町の沖合にある奇岩で、夫婦岩とも呼ばれています。
	シリパ岬	余市市街の西側に突き出している岬で、小樽の東からもよく見えます。北海道内に同名のところが多いが、厚岸湾頭の尻羽岬と余市のシリパ岬がその景観の双璧といわれています。
	余市川堤防沿いの桜並木	ニッカウヰスキー北海道工場に隣接した堤防沿いの桜並木は昭和１０年に植えられたもので、５月上旬にはソメイヨシノの花が咲きこぼれ、散策する人たちの目を楽しませています。
レクリェーション地	余市あゆ場公園パークゴルフ場	全３６ホールのパークゴルフ場で、近くには魚道施設等があり、秋にはサケの遡上を見ることができます。
	浜中モイレ海水浴場	余市町のシンボルでもあるシリパ岬とモイレ山に囲まれた余市湾の中にあり、沖には消波ブロックがあるため波・風が比較的穏やかなことから大変人気があり、また、大変利便性のよい海水浴場となっております。
	観光果樹園	広々と連なる余市の果樹園では、初夏のイチゴから始まり、サクランボ、プラム、モモ、ブドウ、リンゴといった季節折々の果物が次々と収穫されます。余市の果樹栽培は、アメリカ産のリンゴの苗木から始まりました。日本で初めてリンゴを実らせた余市も、いまでは果樹栽培の広がりを見せ、フルーツ王国の名にふさわしい実績をあげています。
	余市フィッシャリーナ	漁業機能空間、ふれあい空間、釣り空間、漁港利用調整空間があり、海洋レクリェーションの活動拠点となっています。
郷土芸能	北海ソーラン太鼓	大勢の漁夫たちに支えられたニシン漁撈の勇壮な漁場の一連作業を、太鼓によって情緒豊かに表現します。
	余市町正調ソーラン沖揚音頭	余市町はソーラン節の発祥の地として、ニシン漁とともに発展してきた町です。このニシン漁撈の拍手をとるために唄われた沖揚げ音頭は、北海の怒涛と闘う漁夫の汗からにじみ出た労働歌で、寒風と波しぶき、そこに踊る銀鱗、北国に生きる者のみが知る独特の力強さをもって現在に唄い継がれています。
イベント	北海ソーラン祭り	毎年７月の第１土・日曜日、まちを挙げてのこのお祭りは、毎年多くの観光客で賑わい、浴衣姿の町民がソーラン踊りを踊ります。また、ソーランふれあい広場や花火大会など多彩な催しが２日間にわたって行われます。
	味覚の祭典	秋には食欲・スポーツの季節にふさわしく「味覚の祭典・余市大好きフェスティバル」が、旬の海の幸・山の幸・もぎたてフルーツが格安で提供します。
	味覚マラソン	味覚の祭典と同じ日に開催され、全国から１０００人以上の市民ランナーが健脚を競い、秋空の下、街は一気に盛り上がりを見せます。

分類	名称	説明文
文化財	旧下ヨイチ運上家	江戸時代から始まったニシン漁。当時の交易を伝える「旧下ヨイチ運上家は、嘉永６年（１８５３年）に改築した当時の古図面を基に復元したもので、国指定史跡重要文化財になっています。
	フゴッペ洞窟	昭和２５年、札幌の考古学少年によって発見された遺跡で、発掘調査の結果、洞窟内には続縄文時代後半（約１６００～１３００年前）の古代の人が彫った岩壁彫刻が数多く残っているほか、土器、骨角器、炉跡などもあり、貴重な洞窟遺跡として国指定史跡になっています。
	旧余市福原漁場	かつてのニシン漁の栄華がしのばれる歴史的建造物として復元整備されたこの施設は、主屋、文書庫、米味噌蔵、網蔵などがまとまって残っており、国指定史跡になっています。
	大谷地貝塚	日本海側に残る縄文時代中期から後期（約５０００～３０００年前）の数少ない貝塚として史跡になった大谷地貝塚は、同時にそこから出土した土器に余市式の名を冠することとなった点でも重要な遺跡です。国指定史跡になっています。
	西崎山環状列石	余市町の市街と日本海が一望できる、標高７０ｍの西崎山の丘上には、大小１００個の自然石群が広がるストーンサークルがあります。楕円形の石が並べられ、環状列石墓と推定され、北海道指定文化財になっています。
	天内山遺跡出土の遺物	天内山は町内入舟町にあった標高２０ｍほどの頂上が平坦な低い山です。古くから遺跡として知られており、ここから出土された遺物は北海道指定文化財となっています。
文化施設	余市水産博物館	北海道百年地域記念事業の一環として建設されて、昭和４４年６月にオープンしました。地域の基礎をつくったニシン漁などの漁撈具や生活用品など、郷土資料を中心に展示しています。
	歴史民族資料館	町内には６０以上の遺跡が確認されています。なかでも余市川河口周辺にある大川遺跡、入舟遺跡、天内山遺跡や、町東部の大谷地貝塚（国指定史跡）、町西部の沢町遺跡からたくさんの遺物が出土しました。昭和５４年６月に開館したこの施設では、おもにそれらの考古資料を紹介しています。
拠点施設	ニッカウヰスキー㈱北海道工場	創業者：竹鶴政孝氏は１９３４年（昭和９年）、自分の理想とするウイスキーをつくるため、りんごやぶどうの産地であり、澄んだ空気と夏でもあまり気温の上がらない、そのうえピート地帯でもある余市町をえらび操業を開始しました。工場内にあるウイスキー博物館では、ニッカウヰスキーの創業から現在までの商品や、琥珀色の夢を追い続けた政孝とリタ婦人の軌跡を紹介。また、二人が暮らした邸宅が復元、工場内に移築されています。ニッカウヰスキー北海道工場は国登録有形文化財・北海道遺産に指定されています。
	余市ワイナリー	２０１１年８月にニューオープンした余市ワイナリーは、全道一の収穫量を誇るワインぶどうを地元で醸して作られた余市ワインをはじめ、レストラン、ギャラリー、ショップを併設し、食とアートを楽しむことができます。
	道の駅 （スペース・アップルよいち）	スペース・アップルよいちは、余市宇宙記念館、ニッカウヰスキー北海道工場に隣接しており、生産者直売所も併設している道の駅です。
	余市農道離着陸場 （アップルポート余市）	広大な滑走路を有する農道空港では、小型飛行機、スカイスポーツの利用の他、本町の特産品の即売会や体験飛行、各種イベントなど多目的に利用されています。農道空港から望むシリパ岬と市街地は絶景です。
	エルラプラザ	エルラプラザは、JR 余市駅に併設した施設で、余市町の特産品を販売宣伝するため作られた物産館で、他に観光案内や観光業務の提供を業務としています。

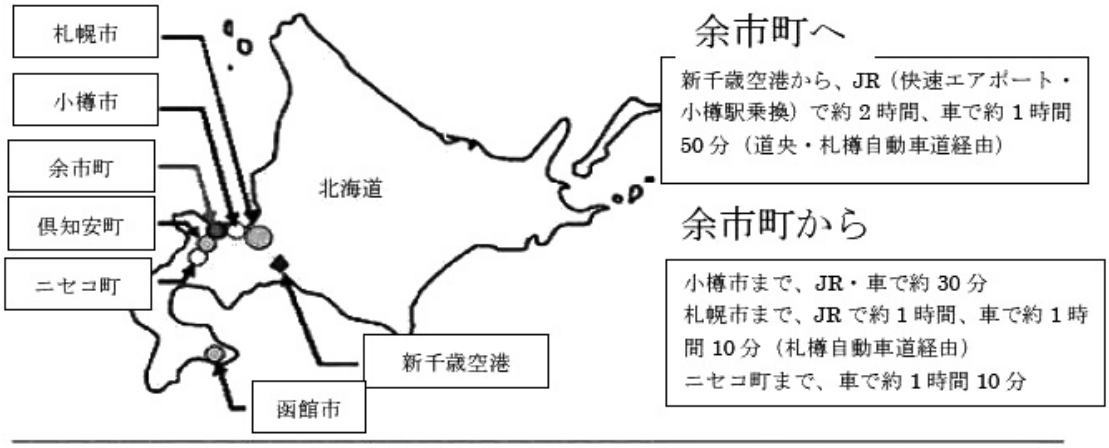
分類	名称	説明文
科学施設	余市宇宙記念館	１９９２年、日本人科学者として初の宇宙飛行士となった毛利衛さんの功績を伝えるため、１９９８年４月、余市宇宙記念館「スペース童夢」がオープン。宇宙の神秘や宇宙開発の最新情報が学べる宇宙ステーションです。
特産品	水　産　物	えび、たら、かれい、いか、鮎　他
	水産加工品	たらこ、身欠にしん、数の子、珍味　他
	農　産　物	りんご、なし、ぶどう、さくらんぼ、トマト、いちご、そ菜　他
	酒　　造	ウイスキー、ワイン
	菓　　子	りんごもなか、ウイスキー最中
	農産加工品	りんごのほっぺ（果汁 100%ジュース）、 ぶどうジュース、トマトジュース
温泉	町内一円	余市には、市街地の銭湯式の温泉をはじめ、果樹園の中、国道沿いにと泉質の違う温泉がたくさんあります。かくれた名湯に出会う楽しみもまた格別です。

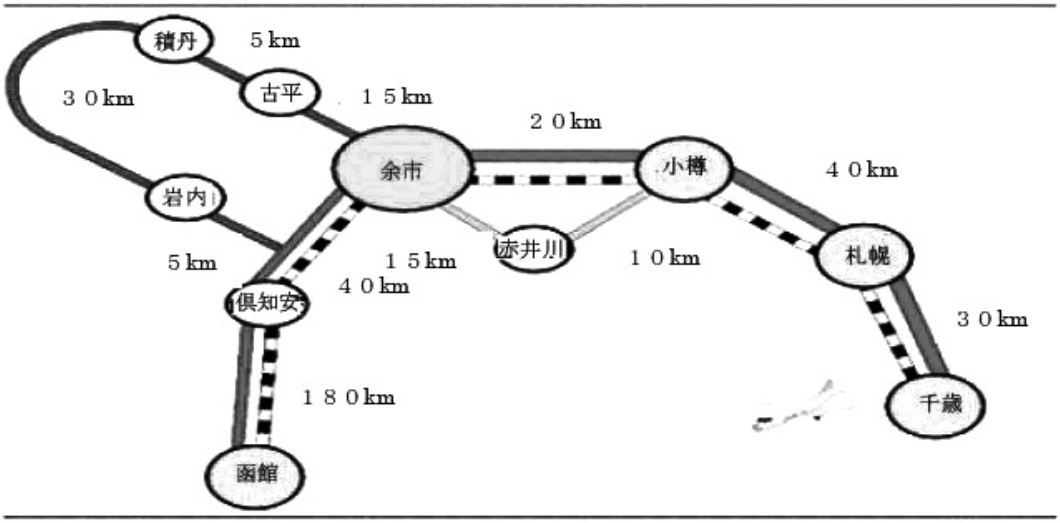


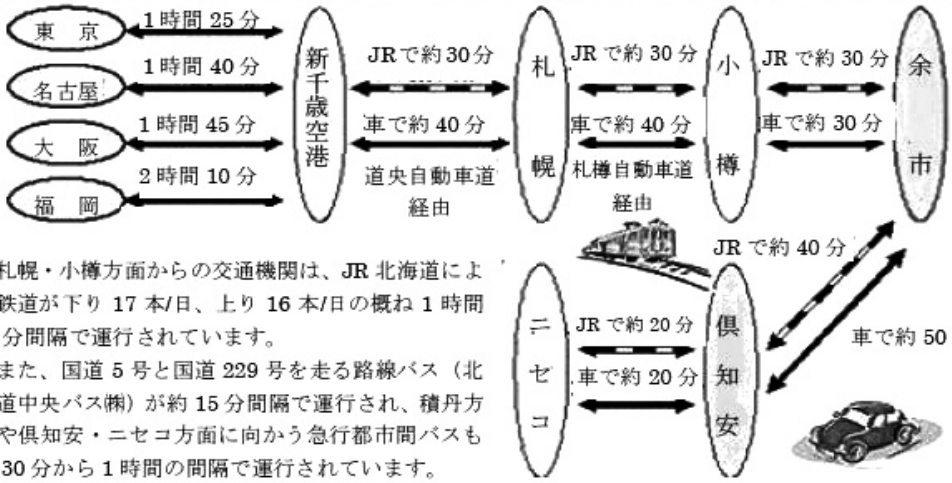


２．立地環境・交通アクセス
（１）余市町へのアクセス

余市町は北海道積丹半島の基部に位置し、道都札幌市から車で約１時間１０分、道内有数の観光地である小樽市から約３０分、空の玄関口である新千歳空港から約１時間５０分となっており、地の利に恵まれています。公共交通のアクセスはＪＲ、バスが主な手段となっております。







札幌・小樽方面からの交通機関は、JR 北海道による鉄道が下り 17 本/日、上り 16 本/日の概ね 1 時間 30 分間隔で運行されています。

また、国道 5 号と国道 229 号を走る路線バス（北海道中央バス㈱）が約 15 分間隔で運行され、積丹方面や倶知安・ニセコ方面に向かう急行都市間バスも約 30 分から 1 時間の間隔で運行されています。

第３章　第４次余市町総合計画≪観光振興≫

１．余市町観光振興の基本目標

滞在型観光の定着化に向けた観光コースの開発に努めます

近年の観光ニーズに対応した参加体験型観光の推進に努めます

北後志観光連絡協議会・後志観光連盟との連携強化のもと、広域的な観光を推進します

余市観光協会との緊密な連携を図り、観光推進体制の確立に努めます

地域の個性を生かした魅力ある観光地づくりに努めます

インターネットによる観光情報の発信、活用に努めます

２．余市町観光振興の主要施策の体系

Ⅰ．町内観光基盤の整備

①町内観光ルートの整備

②参加体験型観光の推進

③各産業と連動した観光振興

Ⅱ．広域観光における推進

広域的観光推進体制の充実

Ⅲ．観光推進体制の確立

観光関連団体との連携強化

Ⅳ．祭り・イベントの開催

①北海ソーラン祭りにおける参加体験型イベントの拡充

②味覚の祭典の実施

Ⅴ．自然に恵まれた本町の優位性を生かした効果的な宣伝活動の促進

①テレビ、新聞、雑誌等における宣伝啓発

②ホームページにおける宣伝啓発

③全道的なイベント開催時における参加ならびに宣伝啓発

その他資料編

１．　余市町観光振興計画の策定体制

○ 余市町観光振興審議会委員名簿

平成２５年４月８日現在

所属団体名	職　名		氏　名
余市町教育委員会	教育委員		久保　　浩
北海道旅客鉄道(株)余市駅	駅　長	審議会委員(H25.3.29 まで)	岩本　隆幸
		審議会委員(H25.4.8 から)	池野　文幸
余市観光協会	副会長		高野　清隆
余市観光協会	専務理事		山本　幸章
余市商工会議所	観光飲食部会長		佐藤　幹男
余市郡漁業協同組合	管理部長		奈良　憲児
余市町農業協同組合	営農販売部営農課調査役		相馬　光一
余市水産加工業協同組合	参　事		越智　直美
余市金融協会	北海信用金庫本店長	審議会委員(H25.3.15 まで)	小向　広通
		審議会委員(H25.3.18 から)	尾鷲　和久
北海道中央バス(株)余市営業所	所　長	審議会委員(H25.3.31 まで)	厚谷　勝利
		審議会委員(H25.4.8 から)	伊藤　雅毅

(順不同・敬称略)

○ 余市町観光振興計画検討委員会委員名簿

平成２５年１月７日現在

所属団体名	職　名		氏　名
余市商工会議所	事務局長		平位　敬二
余市観光協会	企画宣伝委員長		茅根　英昭
余市郡漁業協同組合	青年部長		金田　修司
余市町農業協同組合	女性部長		宮野　秀子
余市水産加工業協同組合	青年部長		山崎　一芳
余市振興公社	取締役専務		秋元　秀樹
余市町商店街連合会	副会長		吉野　純一
余市青年会議所	理事長	検討委員(H25.1.6 まで)	菅原　靖範
		検討委員(H25.1.7 から)	木村　英司
町内居住者（一般公募）	―		新井　　亀
	―		伊藤　葉子

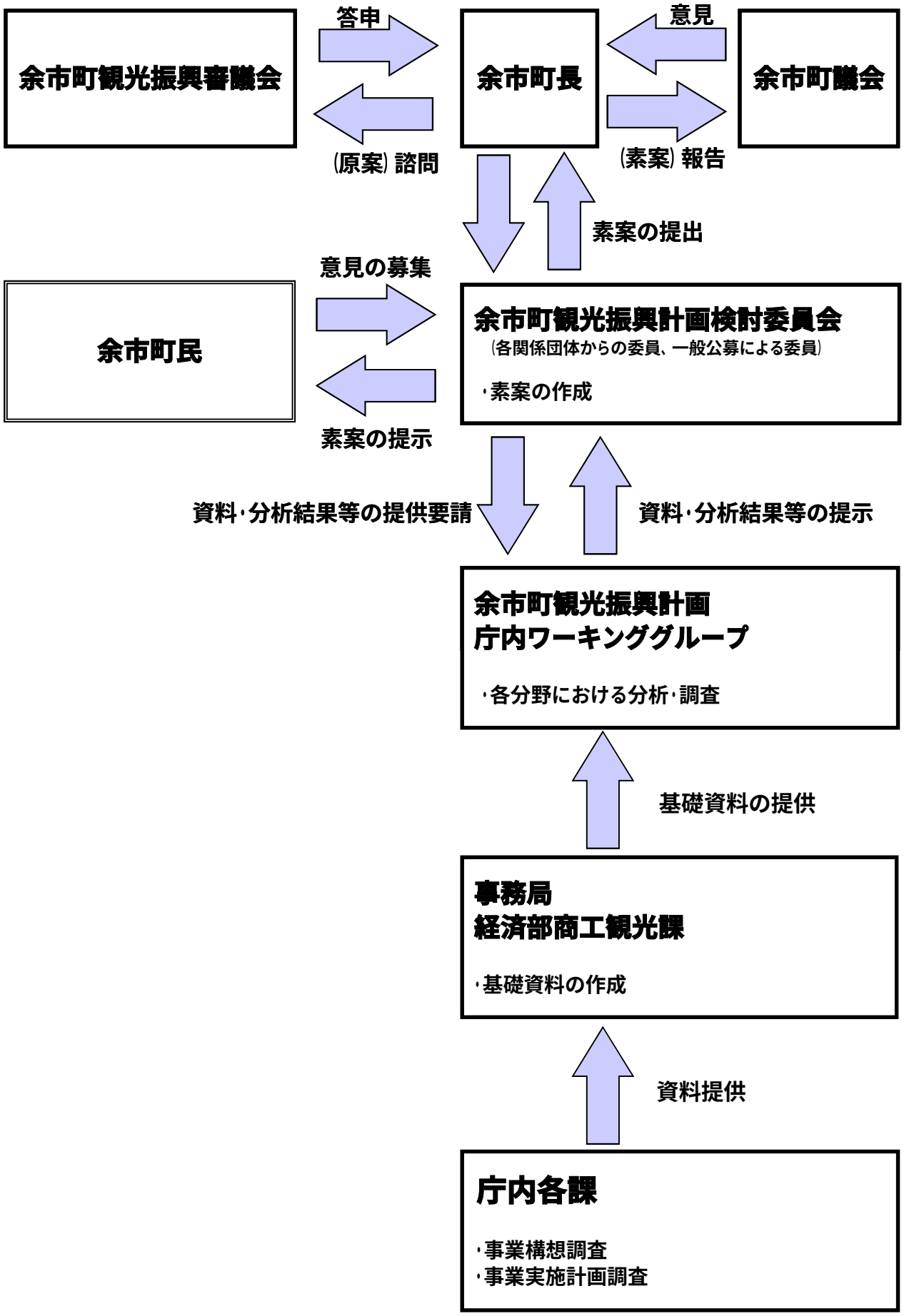
(順不同・敬称略)

○ 余市町観光振興計画庁内ワーキンググループ名簿

平成２５年１月７日現在

所属部署	職　名	氏　名	備　考
経済部商工観光課	課長	岩戸　宏平	座長
経済部	参事	須藤　明彦	産業
経済部商工観光課	係長	清水　光弘	観光
建設水道部建設課	係長	高松　　久	建設
教育委員会社会教育課	係長	浅野　敏昭	教育

○　余市町観光振興計画の策定体系図



○余市町観光振興計画策定経過について

◆平成 24 年 08 月 17 日　　第１回余市町観光振興計画庁内ワーキンググループ会議開催

◆平成 24 年 10 月 23 日　　第２回余市町観光振興計画庁内ワーキンググループ会議開催

◆平成 24 年 11 月 16 日　　第３回余市町観光振興計画庁内ワーキンググループ会議開催

◆平成 24 年 12 月 05 日　　第４回余市町観光振興計画庁内ワーキンググループ会議開催

◆平成 24 年 12 月 12 日　　第１回余市町観光振興計画検討委員会開催

◆平成 24 年 12 月 25 日　　第２回余市町観光振興計画検討委員会開催

◆平成 25 年 12 月 28 日　　余市町観光振興計画庁内ワーキンググループへの経過報告

◆平成 25 年 01 月 09 日　　第５回庁内ワーキンググループ会議開催

◆平成 25 年 01 月 25 日　　第３回余市町観光振興計画検討委員会開催

◆平成 25 年 01 月 30 日　　余市町観光振興計画庁内ワーキンググループへの経過報告

◆平成 25 年 02 月 05 日　　第４回余市町観光振興計画検討委員会開催

◆平成 25 年 02 月 06 日　　余市町観光振興計画庁内ワーキンググループへの経過報告

◆平成 25 年 02 月 14 日　　余市町観光振興計画庁内ワーキンググループへの経過報告

◆平成 25 年 02 月 14 日　　余市町議会産業建設常任委員会への素案提示

◆平成 25 年 02 月 15 日　　余市町パブリックコメント手続開始

◆平成 25 年 03 月 18 日　　余市町パブリックコメント手続終了

◆平成 25 年 03 月 25 日　　第５回余市町観光振興計画検討委員会開催

◆平成 25 年 03 月 26 日　　余市町観光振興計画庁内ワーキンググループへの経過報告

◆平成 25 年 03 月 27 日　　平成 24 年度第１回余市町観光振興審議会開催(諮問)

◆平成 25 年 04 月 12 日　　平成 25 年度第１回余市町観光振興審議会開催

◆平成 25 年 04 月 17 日　　余市町観光振興計画(原案)を答申

よいち町マスコットキャラクター

ソーラン武士!!

余市町観光振興計画

「よいち魅力再発見」

発行日　平成２５年５月

発刊　〒046-8546
北海道余市郡余市町朝日町２６番地
TEL　0135-21-2111
FAX　0135-21-2144

企画編集　余市町経済部商工観光課